

郁達夫の「南遷」に描かれた

房総の風景と人々

樂 殿武

はじめに

「南遷」は、中国人作家郁達夫の第一創作集『沈淪』（一九二二）に収録された三編の短編小説の一つである。作品の時代背景は、大正九年（一九二〇）二月下旬から三月にかけてである。小説では、胸を患い、房総半島の北条へ行って転地療養をしているとき、同じく肺結核で療養中の女学生Oに惹かれ、淡い恋心を抱きながらも、実らない愛に苦悩する中国人留学生伊人が描かれている。対照的なエピソードとして、伊人と下宿先の若い人妻との「恋」が回想されている。

郁達夫（一八九六～一九四五）は、名は文、字は達夫、一八九六年十二月七日に浙江省富陽県滿州弄にある知識人の家庭に生まれた。幼少より秀才に秀でており、七歳の時に塾に入り、一九一三年九月、長兄に従って日本へ留学、一高の予備門を経て、一九一五年から四年間八高で学び、一九一九年十一月、東京帝国大学経済学部に入學した。専攻は経済だが、文学作品を好み、留学中に数多くの作品を耽読し、一九二一年に郭沫若、成仿吾、張資平、鄭伯奇らと文学団体「創造社」を結成、創作を始める。同年九月、上海に戻り、『創造』季刊の発刊に取りかかり、十月に最初の短編小説集『沈淪』を発表した^①。『沈淪』は「沈淪」、「南

遷」、「銀灰色的死」^②三編から成る、中国近代文学史上最初の短編小説集である。この一連の作品は、日本に留学中の病的な青年の心の悩みを告白した私小説のようなものである。『沈淪』は発表後、大いに反響を呼び、発売当時、二万冊という部数を記録したが、一方でその大胆な性の告白に、上海の文壇からたちまち非難が集中した。

「南遷」は、房総半島を舞台とする作品として知られているが、長い間、「沈淪」の陰に隠れて、「沈淪」や「銀灰色的死」と同じように、孤独の中で異性に慰めを求め、青春の煩悶に苛まれ、苦悩する一人の中国人留学生の心情の記録として多く論じられ、いわば延長線上の作品に過ぎないという観点で扱われてきた。そこで、作品の舞台となる北条（館山）については、あまり問題視されなかった。近年、高橋みつる氏が「郁達夫『南遷』の背景―館山・コルバン夫人・北条教会―」（『愛知教育大学』二〇〇三年三月）で、作品の舞台にまつわる背景やキリスト教関連のことを考証し、興味ある内容を示唆した。

本稿は、すでに先行研究により明らかになった「南遷」の舞台となる館山にまつわる人物と事柄に関心を寄せながら、これまであまり論じられて来なかった房総の風景と人々、および作者の心情に大きな陰を落とした時代背景を中心に考え、作品の構成を論じてみたい。

一、房総の風景

「南遷」の冒頭に、「もし日本の地図を開いて見れば、東京湾の東南にひょうたんのような半島があり、広大な太平洋に浮かんでいる。これはすなわちかの有名な房総半島だ！」（『郁達夫小説全編』所収、浙江文芸

出版社、一九八九年一〇月、六五頁、引用者記）と、鳥瞰の視点から房総半島の地理位置を説明するくだりがある。本来、地図は上空から見た地上の地形のため、平板で面白味に欠けるものだが、郁達夫の発想は奇抜で、ユニークである。確かに房総の地図を逆さまにすれば、房総半島はひょうたんの形に見える。この斬新な視点は、郁達夫の生まれ故郷の中国文化によって培われたと思われる。

中国では、ひょうたんは歴史的に最も早い時期から栽培されてきた植物の一つで、食用、薬用のほか、穀物や液体を入れる容器として広く使われていた。また、ひょうたんは疫病菌などの邪鬼を中に吸い込む呪力を持つものと信じられていたため、魔よけとして、旧正月や端午の節句に飾ったりする風習があった。『西遊記』の孫悟空がひょうたんのなか

に吸い込まれたりすることはその信仰の一例である。道教の鉄拐李仙人は常にひょうたんを携帯し、その靈気で不老長寿を保ったと言われ、また仙人たちのひょうたんの中には仙薬が入っていると信じられ、長寿の縁起物としても古くから一般庶民に愛用されてきた。さらに古いところでは、人類の祖先である伏羲と女媧がひょうたんから生まれたとの神話伝説がある。これらはすべてひょうたんの中に異世界が存在するという考えに基づいている。

このように、中国では、伝統的にひょうたんが日常生活や土俗信仰に関わりの多いものであったことから、民間の説話にひょうたんを題材とする話も多く現われた。郁達夫がわざわざ房総半島をひょうたんに見立てたのは、形が似ているだけでなく、ひょうたんの中にあるユートピアのような館山へ行き、病魔にむしばまれた身体を休ませようとする期待も大きかったからである。その気持ちは次のような言葉で語

られている。

安房半島は、地中海の長靴島ほど風光明媚ではないが、打ち寄せてくる波、透き通る青空、穏やかな空気、なだらかな山、海岸の網と村落の住民、これらすべてが南欧の海岸そっくりで、旅人に異郷にいる憂いを忘れさせる。もし英語で言い表すならば、すなわち *Hospitable, inviting dream-land of the romantic age* (中世ロマン時代のような純朴な田舎、山紫水明の仙境) のようだ。 同前 六五頁

周知のように、「地中海の長靴島」というのは、地中海で最も大きな島で、長靴のような形をしたイタリア半島のつま先に浮かぶシチリア島を指す。この島は自然に恵まれ、太陽の光が燦々と輝き、花が咲き乱れ、オレンジやレモンがたわわに実る魅力的な島である。むしろ郁達夫はイタリアの土を踏んだことがなく、「地中海の長靴島」の風景に対する印象は、実体験に基づいた感想ではない。おそらく彼が愛読した浪漫派の作品から得られたものであろう。[*Hospitable, inviting dream-land of the romantic age* (中世ロマン時代のような純朴な田舎、山紫水明の仙境)] という表現には、明らかに中世回帰の思想の痕が見られる。

冒頭の風景描写は読者に主人公と同じく房総半島での休養を期待させる。主人公伊人の目に映る房総半島の最初の風景は、次ぎのように描かれている。

房州に至る道は平坦な田野の間に引かれた小さな鉄道で、線路の両側には、片方に海、片方に山であるか、片側に枯れた木々、片側に

荒れた荒野である。喧噪な東京で、失望傷心の極みに至った神経過敏な青年が、この田園の空気を吸うと、思わず一種の快感を覚えた。伊人が房州に着いた最初の気分は、おのずと非常に軽快であった。伊人が汽車を降りたあと、目の当たりにした四方の松林、幾筋かの薄雲が漂っている青空、広い空き地にゆらめく太陽の光、駅前のお店でひっそりと帳場のカウンターの前に坐った数人の純朴な商人たち、まるで十八世紀の田舎に迷い込んだかのような気がした。アレクザンダー・スミスの『村落の文章』に描かれたDreunthopが、あたかもこの東海の小島の東南の角に移されてきたかのようなのであった。

同前 七一頁

東京は富国強兵と殖産興業が優先された近代日本の縮図のような場所で、生活の糧を得るために大勢の人々がひしめく都市であるが、その頃の館山には、近代文明の象徴である鉄道こそ引かれたものの、まだ人間の手に侵されていない自然が残っていた。そのような館山に着いたばかりの伊人にとっては、房総の風景は空気が美味しく、自然豊かで、人間も純朴であるばかりでなく、近代文明に穢されずに残った、希望のあふれたユートピアであっただろう。

理想郷は風景の集団的表象であるが、作品の冒頭に描かれた理想郷の風景は、松の下の古家、翠屏のような山々、白い雲など、南画や漢詩の中で表現されたような、東洋的なイメージではなく、随所に彼の脳裏に想像されている、文学作品から得られたヨーロッパの風景である。

第一印象だけではない。翌日の朝、起床後の伊人が見た景色も、癒しと感動のあふれたものであった。

真っ赤な陽光が砂浜の雑木林を照らしている。南向きの窓を開けて見れば、周りの空き地の草むらが健全な太陽の光に覆われて、限りなく広がる大空の下に横たわっている。(中略)周囲を見渡せば、広大な青空、遠くと近くに散在している人家、林、空き地、鉄道、小道がすべて太陽の光に浸っており、生気にあふれ、いかにもほほえんでいるかのようなのであった。彼は思いっきりさわやかな空気を身体いっぱい吸い、自分の体中が生き返ったような気がして、笑みを浮かべている。彼は自分自身に「春が来た。ああ、Frühling ist gekommen!」と言い聞かせた。

同前 七五頁

伊人は、欺瞞、差別、失望とコンプレックスに苛まれる東京を離れ、太陽と緑に包まれて、ひょうたんの中にある理想郷に身を置き、つかの間とはいえ、過去の不愉快や身体病魔を忘れることができた。散歩に出かけた彼は、二人の日本人の学生を見かけ、しばらく雑談を交わしたが、楽しいひと時を過ごした。さらに、周辺を散策し、砂浜に足を踏み入れた。この時の風景は、依然として美しかった。朝の砂浜は波が静かに打ち寄せ、水平線を眺めれば、伊人は誰もいない海岸の風景を発見した。

萱葺き家の庭を通って、松の木の長い影を踏みながら、さらに二三歩踏み出せばもう砂浜であった。静かな海岸には人影もなく、穏やかな日の光が降り注いでいた。海水が太陽の光を反射して、まるで微笑んでいるかのようなのであった。砂の上に幾筋か人の足跡がついて

あった。遠く東の方を眺めると、幾つかの集落、何軒かの漁師家が空气中に浮かんでいて、透き通った空気が林の木々や家の屋根を包んでいた。

同前 七七頁

右のような牧歌的な風景だけでなく、「六の崖上」に小雨の降りしきるなか、〇を見舞いに行く場面が描かれた。この風景は、前にたびたび比較されたようなヨーロッパの景色ではなく、「小雨がそぼ降り、家屋、林、海岸がかすんでいて、まるで水墨画のようだ」と、一転して東洋的なセンチメンタルな雰囲気である。大正八年（一九一九）当時の館山周辺の天気情報の記録^③を見てみると、二月は降雨量一八九・九㎜、湿度六九％、平均気温四・五℃（平均最高八・四℃、平均最低一・三℃）、日照率四三％であり、三月は降雨量一六七・六㎜、湿度七四％、平均気温八・四℃（平均最高二二・二℃、平均最低四・四℃）、日照率三五％であった。このデータを見ると、実際の自然環境が作品に描かれていた状況より厳しいことは想像に難くない。

風景を一つ一つ追ってみると、さわやかな朝（肺病の娘）、光まぶしい昼の砂浜、誘惑的な午後（婦人）、富士山の眺め、センチメンタルな夕方の海岸、明るい月光の夜、小雨の降りそそぐ寒い午後、雨後の朝の漁村、海の景色、北条の夜など、主人公伊人を取り巻く景色の空間的文脈が明らかに存在している。しかも、これらの風景描写からは、立ち上る里の炊煙や漁村の生臭い匂いなどの生活風景が抜けていて、作者の主観的な透視像であると言える。

このように、「南遷」に描かれた房総の風景は、郁達夫が滞在したかつての館山の単なる原風景のありのままのすがたではなく、作者が意識

的に誇張して描いた牧歌的な理想郷である。しかし、この理想郷は、東洋的ないわゆる「山紫水明」「白砂青松」「桃花流水」のような桃源郷ではない。郁達夫は東洋的な風景体験の継承をせず、西洋の浪漫派の手法を取り入れた。同時に、作品の全体にちりばめられた風景は、甘美な田園詩のような風景描写と主人公の対照的な心情の対照を現しているように、作者が物語の展開に沿って意識的に布置した舞台背景ではないだろうか。

二、作品に登場した人々

『南遷』の登場人物を見ると、伊人は二十四、五歳で東京帝国大学の学生、C夫人は五十五、六歳で敬虔なキリスト教信者、男子学生は二人、Bは二十歳前後で東京高等商業学校の学生、Kは二十六、七歳で神学校進学前の学生、女子学生は三人、Oは十六、七歳で上野の音楽学校の女子学生であり、ほかの二人は詳しく述べられていないが、やはり学生である。

まず主人公「伊人」の名前は、字面から見て分かりやすいようだが、はっきり説明できない。『新華詞典』などの辞書を調べてみると、「彼の人（意中に考えている）人」との説明があるが、やはり要領を得ない。しかし、郁達夫がかつて熟読した漢文古典を読むと、「伊人」という名前が明らかに『詩経』に由来していることがわかる。例えば、「秦風」の「蒹葭」という詩には、次の三段の詩句がある。（傍線は著者）

蒹葭蒼蒼、白露為霜。所謂伊人、在水一方。溯洄從之、道阻且長、

遡游従之、宛在水中中央。(兼葭蒼蒼たり、白露霜と為る。所謂伊の人は、水の一方に在り。遡洄して之に従えば、道は阻にして且つ長し、遡游して之に従えば、宛として水の中央に在あり。)

兼葭凄凄、白露未晞。所謂伊人、在水之湄。遡洄従之、道阻且躋。遡游従之、宛在水中坻。(兼葭凄凄たり、白露未だ晞かず。所謂伊の人は、水の湄に在あり。遡洄して之に従えば、道は阻にして且つ躋る。遡游して之に従えば、宛として水の中坻に在り。)

兼葭采采、白露未已。所謂伊人、在水之涘。遡洄従之、道阻且右。遡游従之、宛在水中沚。(兼葭采采たり、白露未だ已まず。所謂伊の人は、水の涘に在り。遡洄して之に従えば、道は阻にして且つ右す、遡游して之に従えば、宛として水の中沚に在り。)

詩における伊人については、『四庫全書』を調べると、『詩補伝』では、「伊人謂彼国人也」、「統呂氏家塾詩記卷一」では、「伊人者習礼之人也」、「段氏毛詩集解」においては、「伊人指賢者也」、「読詩私記」の「秦風考」では、「伊人知礼義之人也」と解釈している。これらの解釈を総合して考えると、「伊人」というのは賢く教養もありながら孤高の異国人であるという意味で付けられたと考えられる。

次に、伊人が房州で身を寄せた療養先の主人C夫人については、高橋みつる氏はすでに「郁達夫『南遷』の背景―館山・コルバン夫人・北条教会―」(前出)で、「明治末から昭和にかけて房州の医療伝道に大きな足跡を残したコルバン夫人をモデルとしたものである」ことを明らかにしている。

コルバン夫人 (Mrs. Sophia Ellen Colborne) は、八幡海岸に結核療養

のための療養所「コルバンホーム」を建て、北条町のキリスト教会(後の聖アンデレ教会)で伝道に尽力した人物で、南三原に教会と幼稚園を設立し、キリスト教を伝道するとともに、安房地方の幼児教育に貢献したために、没後、和田幼稚園内に彰徳の碑が建立された。しかし、長い間、地元や教会の関係者^④を除き、あまり注目されなかった。ところが、偶然にも石川啄木の未亡人である身重の節子夫人を八幡海岸の片山かの宅に紹介し、世話をしたことから、当時のことを回想する文章でコルバン夫人に触れている^⑤。近年、コルバン夫人はさまざまな角度からスポットを当てられ、俄に注目されるようになった^⑥。しかし、これらの文章では、敬虔なキリスト教信者、もしくは私財を投じて肺結核患者の回復に全力を尽くすような献身的な人物、いわばマザーテレサのような聖なる人間として描かれている。

コルバン夫人は「南遷」においては副次的な人物で、細やかな性格描写がなく、作品のみで読み取れるものは少ない。そもそも「南遷」は「沈淪」と同じく、主人公の心理と情緒の変化についての描写が中心で、主観的に主人公の感情を表現している^⑦。そこに郁達夫の小説の特徴が鮮明に現われている。コルバン夫人は作品の中で聖職者としてばかりでなく、生活者として描かれている。例えば、伊人は東京高等商業学校の学生であるBという人物のアパートに引っ越し、一緒に住むことの可能性について相談を持ちかけたとき、Bは「C夫人は有名なけちで、もし彼女のところに長く居候したら、嫌がられるかも知れませんよ」(前出八一頁)と言ったくだりがある。

コルバン夫人を知る人物の回想文を読むと、Bの言葉を傍証するようなエピソードがある。コルバン幼稚園の園児だった方^⑧の話によると、

「松田の家で養鶏業をしていた時、ミセス・コルバンは毎日卵を買いに来た。そして、卵をなせて『つるつるしているのはだめ、ざらざらしている卵は新しいです』と云って買って行かれた」という。これを見ても分かるように、コルバン夫人はきわめて堅実な生活者であることは間違いない。

コルバン夫人の年譜を見ると、明治四十二年（一九〇九）に英国聖公会宣教師を退職し、明治四十五年、自給宣教師として再来日した。この時、夫のコルバン医師はすでに脳溢血を患わり、医療活動ができない状況にあり、大正六年（一九一七年）二月にとうとう病死してしまった。未亡人の外国人として異国の地で布教活動を続けながら、生活していくためには、強靱な精神力と生活者としての智慧が必要である。コルバン夫人がどのぐらい「私財」を持っていたのか、どのような手段で収入を得て生活していたのかについては、不明な点が多い。しかし、結核療養のための療養所「コルバンホーム」が、すべて寄付や個人の私財によって経営されていたとは考えにくいし、不可能であろう。成瀬政男氏の「啄木夫人と京子さんとは、啄木の死んだあと、このコルバン夫人にひきとられたのである。その生活費も、コルバン夫人から出ていたらしい」という記述は一部真実であるかも知れないが、額面通りに受け取るべきではないであろう。ただ、コルバン夫人の性格や個人資産への詮索およびその経済力を検証することは、本稿の意図するところではない。先行研究に見落とされ、また往々にして神化されたコルバン夫人の人間像を「南遷」を通じて還元したい。

「南遷」には二人の男子学生が登場している。そのうちのひとり、K という人物は二十六、七歳で、細いワイヤ型のメガネをかけ、ひげと長

髪を蓄え、神学校進学前の学生である。この人物は、神に帰依する人間でありながら、精神的な昇華を求めず、絶語、絶叫などでエネルギーを発散したり半裸で雨に打たれるような荒行をしたりして、さまざまな奇行を演じた。その中に、宗教の倫理的超越性を理解せず、過酷な苦行だけに終始するKの言動を通して、日本人を批判しているように思われる。特に、Kの話した英語は、「Do you understand my English」や「Let's us speak English heca-afar」のうとく特異な綴りで表記されている。この英語の表記は、日本人の英語の発音の癖を故意に表現するものである。その裏にKを始めとする民族的偏見に根ざす無理解と悪意を抱く日本人に対する郁達夫の嘲笑が込められている。

伊人は当初、病氣療養の目的で房総半島にやって来て、自然にふれて、心身を癒していたが、自分の演説に対するBの反論とKの礼拝における批判により、差別、失望とコンプレックスの気持ちが蘇り、憂鬱な気分になってしまふ。精神的な憂鬱に加え、身体も再び病魔にむしばまれてしまふ。

そもそもKの批判のほこ先は、Oに引かれた伊人の言動である。伊人は同じく肺結核で療養中の女学生Oに惹かれ、恋心を抱きながらも、実らない愛に苦悩するが、その根底には、孤独の中で異性に慰めを求め、憂鬱と劣等感ゆえにその気持ちを上手に表現できず、青春の煩悶に苛まれる「沈淪」の主人公の苦悩と共通している。当時の多くの中国人留学生にとつては、ハイカラで清楚な装いをしている新時代の日本の女学生はあこがれの対象であり、魅力的な恋愛の対象であった。日本は、清国より先に女子教育を行ったため、東京の中流家庭の娘は女学校に通うようになり、朝と午後、女学生の登校と下校の姿が日常風景の一部となつ

た。男子と女子は通う学校が異なるものの、道で出会う機会が増え、異性を意識する機会も多くなった。女子学生は、明治時代にはじめて生まれた新しい集団であり、明治三十二年に公布された高等女学校令により、明治三十年代後半から、個性のある、新しい恋愛観を持つ女学生が急増し、留学生と出会うチャンスも増えた。

伊人は、ゲーテの詩や小説を好む文学青年だが、孤独に苛まれる中で、普通の若者と同じように、異性を意識し始め、慰めや愛を求めるようになる。Oは十六、七歳で上野の音楽学校の女学生で、しばしば高熱を出す重症の肺結核患者でか弱い女性である。彼女は、療養中にバイブルクラスに参加するときに、コルバン夫人のところで伊人と知り合ったのである。伊人は海岸を散歩するとき、偶然にOと出会った場面がある。その時に、Oはゲーテの「Mignon」（ミニヨンの歌、シューマン作曲）を歌った。「南遷」はミニヨンの歌を全文引用しているが、その最初の部分を以下に示しておく。

Kennst du das Land, wo die Zitronen blühn

（知っていますか レモンの花咲く国を）

Im dunkeln Laub die Goldorangen glühn

（暗い葉陰で赤々としたオレンジが輝き）

Ein sanfter Wind vom blauen Himmel weht

（柔らかない風が青い空からそよ吹き）

Die Myrte still und hoch der Lorbeer steht

（ミルテの花は静かに 月桂樹は高く聳える）

Kennst du es wohl?

（その国を 知っていますか）

Dahin! Dahin!

（そいへ そいへ）

Möcht ich mit dir o mein Geliebter, ziehn!

（私はあなたと行きたい ああ愛する人よ 連れて行って）

この部分を聞いたところで、郁達夫は「彼女の悲愴なやや震えた声が薄暗い海辺の空中で揺れ動いて響いている。彼は自分の五官が薄い紫色の膜にすっかり包まれたような気がした」と書いた。

Oは伊人を騙した東京の若い人妻Mと対照的な存在として描かれ、精神的な愛と性の衝動に苦しむ対象として登場している。伊人は性的欲求とキリスト教的禁欲主義との葛藤に苛まれ、Oに告白せずに悩み苦しんでいた。それはすべてキリスト教の倫理観に収斂されることが可能であろうか。前作の「沈淪」に告白されたように、主人公が抱えつづけた拭いきれない劣等感である。この劣等感は主人公個人の問題ではなく、当時の時代背景に現されたように中国の直面した国内と国際の状況によって醸し出されたのである。

三、時代背景

郁達夫は、大正八年（一九一九）十一月、東京帝国大学経済学部に入學し、翌年の二月から三月にかけて房州に滞在した可能性が高いと言われている。「南遷」は作者の実体験が下敷きとなっていることがすでに論じられている。そのため、郁達夫の日本人観には、当時彼の見聞した

出来事が投影している。時代背景を巨視的に見ると、大正七年から大正八年の初頭にかけて二つの大きな事件が進行していた。

一つは、中国の北京政府と広東政府^⑨の対立という南北対立の問題である。南北対立を解決するための和平会議の話し合いはまとまらず、大正九年七月に安直戦争^⑩が勃発し、徐世昌は南北平和統一を宣告するものの、孫文ら広東政府は不承認で終わってしまったのである。祖国の内乱と社会不安は、郁達夫の一連の作品における主人公の憂鬱の遠因となっている。

もう一つは、第一次世界大戦の戦後処理における山東問題である。大正八年四月二十八日の講和総会議で日本全権牧野伸顕が山東還付という日本の主張を声明し、四月三十日に講和総会議で日本の要求を承認されたことにより、五月四日に北京大学の学生を始めとする三千人の学生が抗議デモを行ない、親日派と言われる曹汝霖交通総長を始め、陸宗輿前駐日公使および帰国中の章宗祥駐日公使の邸宅を襲撃した。この一連の問題の発端は大正四年（一九一五）一月十八日に大隈重信内閣が袁世凱政府に提出した五号二十一ヶ条の要求である。同要求は同年五月四日の閣議を経て、対華最後通牒案として決定され、七日に日置公使より中国外交総長に交付され、九日に中国政府が受諾、二十五日に交換公文に両国政府が調印したのである。これが後の山東問題を引き起こし、「五・四」運動の導火線となった。

北京大学の学生らの抗議デモについて、『東京朝日新聞』（大正八年五月六日付）は第二面に次のように報道している。

北京排日暴動 千余名の学生曹汝霖邸焼打、章公使重傷を負ふ。四

日北京特派員発

第一報 四日正午より北京大学生を初め千余名の学生安定門に集まり国賊曹汝霖、売国奴陸宗輿、章宗祥、山東を返せ等書きたる旗を押立て示威運動を為し其の一部は巡警等と衝突し既に東単牌楼石大人胡同なる曹汝霖邸を襲ひ今や同邸を焼打しつ、あり曹汝霖は私邸にあらざりし為無事なり（午後八時十分発）

第二報 曹汝霖邸の焼打は巡警消防の努力に依り邸宅は半焼となりて収まり襲撃せる学生も多数の負傷者を出したるが曹汝霖氏は章宗祥氏と共に総督府の園遊会より帰り談話中に襲撃を受け早くも家族と共にグランドホテルに逃れたるも章氏は後頭部に重傷を受け仏国病院に入院せり陸宗輿氏の邸は三百の巡警を以て警戒しつ、あるを以て無事なり尚彼等学生の押立てたる旗は前電の外倭奴追払ふべしとか其他日本に対して非常の侮辱的言辞を書き聯ねたり（午後九時三十五分発）

関連記事として、第五面に「排日暴動の中心北京大学生 服部博士が骨折つた学校 学生は地方富豪の息子 暴動は今後各地に波及せん」と、北京大学や学生の出身などを説明し、終いに「某消息通」の情報として「軍隊巡警等の実力者が加はつて居らぬから暴動としては大きくはないが排日気勢は必ず大きくなるに相違ないと」付け加えた。さらに「北京の三人男 憎い坊主の袈裟扱ひを受けた若手の俊才」という記事で学生から槍玉に挙げられた曹、陸、章三人を紹介し、「押寄せた曹氏邸 北京内城にある大臣町」などの記事で追加報道をしている。

北京の抗議デモの情報が日本に伝わった後、すぐ留学生の間に大きな

反響を引き起こした。『東京朝日新聞』（五月六日付）は第五面に「支那留学生間に流説 公使館打消す 北京に於ける支那学生暴動の報東京留学の支那学生に伝はるや諸説紛々として穩かならず、明日七日支那公使館に於て大会を開催すべしとの噂拡まり大いに排日の氣勢を高めんとするものもあれど同館にては極力その噂を打消しつゝ、あり全く無根のことに過ぎず」と、短く伝えている。

この報道に合わせたように、第四面に「中華留学生鑒 本館為代表 国家機関除特派大使外向無任意外借開会及宴会之例 七日在本館開会之説純屬謠伝幸誤信 此啓 中華民國駐日本公使館」（中華留学生に告ぐ 本館は国家を代表する機関であり、駐在大使を除き、外部に対しては会議や宴会に場所を提供した前例なく、七日に本館で会議を招集するということはデマの類に過ぎず、信ずるに値しない。中華民國駐日本公使館）と広告を出して、公使館での抗議大会開催を強く否定しているが、七日には中国人留学生は約二千名、予定通り東京の三宅坂、葵橋、虎ノ門の三カ所に集まり、中央大学の学生周天爵の指揮の下で、中国公使館に向かつて行進したが、二百五十名の巡查と三十名の憲兵に進路を阻まれたため、二手に分かれて、各国公使館を訪れ、スイス公使とロシア公使館の一等書記官と面会をし、英文の嘆願書を手渡した。一行は再び中国公使館に向かうが、警戒中の憲兵警官約百名と衝突し、慶應大学の学生李子雲を始め、留学生六名が拘束された。報道によると、当日は李子雲ら十一名が警視庁に連行されたほか、表町署には張好善、趙雲二名、麹町署には除景新、譚政、黄森生ら二十一名、併せて三十四名の留学生が拘束された。翌日八日には、麹町署に連行された張景新ら二十一名は釈放されたが、二十日に東京地方裁判所刑事二部法廷で一高在学中の

杜中ら七名に対する第一回の公判が始まった。

東京の留学生たちの抗議デモは、かなり大規模に展開され、当時の緊迫感がほぼ百年前の新聞報道でもひしひしと伝わってくる。郁達夫はこの時期にまだ八高の卒業を控え、名古屋にいて、デモを目撃していなかったが、新聞報道を通してデモの様子を把握し、留学生たちの心情に共感していたはずである。この体験は「南遷」の主人公の心情の吐露に通じ、その日本人観に影を落としたのであろう。

北京大学の学生たちが抗議デモの後、大隈内閣の最終通牒である五月七日を国恥記念日とし、北京で国民自決大会を召集したり全国に打電したりして、近代初のナショナリズムを高めた。抗議運動はすぐ中国全土に波及した。五月には、山東省、天津、上海、蕪湖、南京、長春、常德、福州、六月には、香港、広東、上海などに飛び火して、激しい抗議運動に発展していった。六月五日に上海の日系紡績工場で二万人の労働者がストライキを敢行し、上海の商人らもこれに呼応して罷市を開始し、抗議活動はさらに中国各地に広まった。六月十八日に、北京と天津の学生が大請願運動を起こし、七月十九日に旧満州の寛城子で日中の軍隊が衝突した。さらに、十一月十六日に、日本浪人百名余りが福州で抗議デモの学生らに暴行を行い、いわゆる福州事件を引き起こした¹²⁾。学生たちを応援するために、福州の学生や商人がストライキをし、二十一日に北京と上海で相次いで抗議運動が起きた。大正九年（一九二〇）一月三十一日に、北京の学生らは山東問題についての日中直接交渉に反対するために、抗議デモを行い、これがきっかけとなり、五月二十二日に中国政府は山東問題につき、直接交渉を拒絶した。

このように、中華民國は一九二二年に近代国家として成立したもの

の、国内において軍閥同士の戦いが絶えず、分裂状態にある。それに乗じて、日本政府は独善的かつ高圧的な対中政策を取りながら、借款を利用して二十一ヶ条のような条件を呑ませ、独占的な国益を獲得しようとした。そのため、日中関係は険悪なムードに包まれ、在日の留学生たちの対日感情も悪化している。これらの事件は『東京朝日新聞』のようなメディアにより報道され、留学生たちの中で広く知れわたっていた。特に、五月七日に東京で行われた留学生たちの抗議デモが、警官との衝突事件に発展し、逮捕者が出たということは、在日留学生たちに大きな衝撃を与えた。郁達夫はたとえその場面を目のあたりにしなくても、在日留学生の一員として当然、影響を受けたわけで、彼の日本観に暗い影を落とした。これが「南遷」に描かれた人物像の伏線をなしているのである。それが学生BとKの人間像につながったのではなからうか。

おわりに

郁達夫は、第一創作集『沈淪』で、現代人の苦悶である「生の苦悶」と「性の苦悶」を描いた。小説の主人公は新時代の教育を受け、人生の理想に燃えながらも、遅れた社会の現実との矛盾や葛藤の中で、余儀なく挫折感を味わい、余計者としての意識を持ってしまう。その中で、「南遷」はほかの二編と異なり、明るい風景の描写があり、房総で出会った人物が登場し、ヨーロッパの浪漫主義文学の香りが漂っている作品である。

「南遷」では、郁達夫は風景を物語の展開に沿って意識的に布置した舞台背景として位置づけし、C夫人を始め、概念的で対照的な人物を描

いたが、大正八年前後の時代に起きた社会的な出来事に触れようとしなかった。これはすでに指摘されているように、明らかに「赤裸々な自己告白」を標榜する日本自然主義の影響を受けた告白小説の影響および作家の身辺雑事を題材とする私小説の影響によるのである。「沈淪」には、まだ「中国、ああ、中国、あなたはどのようにして強くならないのか？」というような叫びがあったが、「南遷」では、神経と肉体の悩みだけに終始し、強烈な政治的なメッセージが発信されていない。だが、房総を理想郷として描いたこの作品は、当時の読者にエキゾチックな幻想を抱かせ、現在の読者にもかつての牧歌的な原風景を連想させる機会を与えた。また、図らずも大正初期の房総の風景と人間の記録として現代まで残り、その価値が時代によって見直され、異なる側面から評価されることになるのである。さらに、「南遷」は房総半島に残した中国人留学生の足跡として、留学生研究にも資するところがあるのではなからうか。

- ① 郁達夫はその後、教鞭を執り、また上海、武漢、福州などで抗日宣伝活動に携わり、一九三八年末にシンガポールに渡り、ジャーナリストとして活躍した。シンガポールが日本軍の手に陥落した後、彼はインドネシアのスマトラ島に亡命し、名前を変えて暮らしていた。現地で唯一日本語に精通する人であるため、日本軍に駆り出されて通訳を務めたが、一九四五年八月九日に、日本軍の憲兵に殺害された。享年四十九歳である。その遺骸はいまだに所在不明であるという。最近、当時の憲兵の生存者の証言が世に出たことから、日中の学者の間でマスクミを巻き込んで論争が行なわれている。
- ② 初出は、上海『時事新報』副刊「学灯」（一九二二年七月七〜九日、十一〜十三日）である。

- ③ 気象庁の観測データ (<http://www.data.jma.go.jp>) を参照。館山の気象データが

ないため、近くの勝浦の記録を使用した。

④ 粕谷常吉『房州に光を掲げた人々―房州伝道百年小史―正・続編』（聖公会出版・事業部、一九七三年初版、一九八九年改訂）や大澤克次編集『コルバン先生の思い出』（日本聖公会、横浜教区南三原聖ルカ教会、二〇〇四年）を参照。

⑤ 成瀬雅男『石川啄木の遺族につながる少年の日の思い出』（千葉県安房郡白浜町役場、一九七〇年）九頁～十一頁を参照。

⑥ 高橋みつる『郁達夫「南遷」の背景―館山・コルバン夫人・北条教会―』（前出）と平本紀久雄『コルバン夫人―房州に捧げられた人』崙書房（二〇〇八年）を参照。

⑦ 「南遷」の主人公は「伊人」という名前を与えられたが、主人公の気持ち以外に登場人物の心理を描いたことがないことから、やはり私小説の要素が強いと見るべきであろう。

⑧ 『コルバン先生の思い出』（大澤克次編、日本聖公会横浜教区南三原聖ルカ教会出版、二〇〇四年）における鶴谷（旧姓根本）二代氏の回想による。

⑨ 一九一七年北京軍閥に対抗して孫文がたてた軍政府。

⑩ 北洋軍閥内部の段祺瑞ら安徽派対曹錕ら直隸派の戦争。直隸派が勝利し、一九二四年まで北京政府の実権を握った。

⑪ 『東京朝日新聞』（大正八年五月八日と九日付）の掲載記事による。

⑫ 一九一九年十一月二十二日付の上海『申報』を参照。

（らん） でんぶ・本学国際人文学部国際交流学科准教授